

家族療法を学んだ人、日常でどう活かしてる？

実践から学び続ける事例検討

2

千葉 晃央



事例検討がない…

京都国際社会福祉センターで家族療法を学ぶ中で事例検討をたくさんする機会があった。この事例検討のやり方は、それまでしてきたものとは進め方が大きく異なっていた。参加していても興味深いし、事例を出せばさらに理解が深まる。このやり方は、もっと多くのところで行われて、活用されるといいのにと強く思っていた。

1999 年から京都国際社会福祉センターで家族療法を学び、ほとんどの研修を修了できた。この頃、私は福祉施設で仕事をしながら、社会人学生として、大学院に入学していた。その大学院では京都国際社会福祉センターでもお世話になった団士郎先生が講師を務め、家族についても学ぶことができるときいて入学した。

大学院は、1 学年 60 人程度が定員で、社会人学生が半分以上いて、主に夕方から夜間に授業が行われた。つまり院生は支援の第一線で活躍する人が多い環境だった。

講師陣も充実し、そこに集まった院生の仲間にも恵まれていた。

ただ一つ、気になったのは、入学して半年、こうした実践家が多く集まった院の授業の中で、事例検討がほぼなかったことである。

社会に自分でプラスする

そのことを、団士郎先生に話すと「自分でやったらいいやん、やるんなら、手伝うよ」といってくださいました！こうなったら、やるしかない和社会人院生 1 年の 2001 年 12 月に初回を開催した。会のタイトルは「家族をテーマにした事例検討会」。通称「かじけん」と呼ばれることが多かった。

会場は大学の教室を使わせてもらうことになった。教員である団士郎先生がいてくださることで、実現できた。開催頻度は、月

1回、大何〇曜日と固定をした方が分かりやすいということで、第3木曜日で固定した。そして、8月に関しては、大学の休みもあるので開催せず、それ以外は毎月開催することで進めた。

参加者は院生の仲間と私の職場や仕事のお仲間に声をかけて始めた。そして、メールのメーリングリスト機能を使い、登録をして、次回の案内を告知することになっていく。その時に、文章を添えたり、写真を添えたりして、家族とは？支援とは？人生とは？ヒューマンサービスとは？のような問いかけを行うことが習慣化していく。かじけんのメーリングリストだけでなく、自分が所属していた、院生のメーリングリスト、学会のメーリングリスト、社会福祉士会のメーリングリストにも投稿した。その結果、さまざまなところからの参加者が来るようになった。

参加要件なしの「ごちゃまぜ」

参加の対象は、こういった事例検討に関心がある方として、ごちゃまぜで行った。福祉職、心理職、先生、保育士など支援者が多くおられたが一般企業の方、アートな方も、専業主婦もおられた。広い意味でのヒューマンサービスであり、いろんな業界の話が聞けるし、つながりもできるしとても面白い時間だった。豊かであった。

会は、事例検討だけではない。会の前半は参加者が一人ずつ話をする。「最近こんなことあるんですよ」という話をそれぞれが2分ぐらい全員話す。家族の話でも、仕事の話



でも、プライベートな話でもなんでもよかった。それが重なったり、影響し合ったりするので、そこも面白かった。20人いたら、一人2分で40分というように、話す準備ができた人から話し始めていった。ここでの話がごちゃまぜ状況での出会いをより具体化していった。こうしたやり方がオープンダイアログやリフレクティングという言葉で最近は整理され、紹介されることも多い。これも京都国際社会福祉センターで団先生、早樫先生はじめ他の先生もよく用いた研修の場の作り方であった。

最近こんなことあるんですよ

時間は18時半から21時。2時間半。合計150分。前半60分、後半事例検討90分ぐらいがよくあった割合ではないか。会場は多くは立命館大学の衣笠キャンパスで行われた。自宅からも近く、歩いていくことができた。第3木曜日はさっと帰宅して、大学に向かった。教室に着くと、私が一番の到着であることが多く、待たせてしまっていると「ごめんなさい」というスタートであった。教室入口には、マグネットで「家族をテ

ーマにした事例検討会」の会場看板を貼った。教室に入ると机を壁際に移動させて、椅子だけで円を作って待った。到着した参加者は画用紙にクレヨンで自分の名前を書いて3つに折ってもらい、着席した足元に置いてもらった。その名札は、次回も使い、参加者が増えるごとにたくさん溜っていった。2回目以降は、到着したら自分の名札を探して置くのが定番になっていく。

研修にしない

会が終わると、必ずごはんやお酒というのはあまり定例化しないようにした。メインの集まりはあくまで会で、飲み会だけ参加するという逆転が起こるのは希望ではな

い。目的は、援助職を応援し、日々の暮らしや仕事が少しでも活性化すること。そこに注力した。

そのため、事例は仕事で担当しているものが多かった。他には、ご自身の家族の場合、または家族ではなく、職場のチームについても考えたこともあった。この事例検討のやり方は、集団で過ごす場に関して検討するときにも応用できた。

「研修にしない」ことも大切にした。誰かがよく知っていて、一般の人は知らないということが起こりにくいのが家族の領域。誰もが家族に関しては、経験があることが多い。そのため、あくまで「コメンター」として団士郎先生が出席。また、早樫一男先生も可能な限り、足を運んでくださった。事例は事前に誰が出すか決めておくことが多かった。





社会への還元

参加費は無料にした。実費をもらうことも考えた。しかし、結局は千葉がご縁に恵まれて学ぶことができたことを社会に還元したいという願いで、進めていった。

毎回、記録をして、次回に前回欠席者も雰囲気分かるように「かじけん通信」も作成配布をした。文字お越しは千葉が長くしたが、同じく主催をしてくださった方々も作成を担ってくださった。本当にありがたい。

準備したのはキッチンタイマー。前半の話が誰もが話せるように公平に時間を割り振れるよう、1人2分ずつというように用いた。事前申し込み制もとらずに開催し、数名のこともあれば、20 数名になることも。200 回以上結局開催することになる。

新刊、既刊のご案内

このように、ここで紹介した学びを『対人援助のための「観察力」と「質問力」の磨き方: 実践に役立つ事例・ワーク・質問集』（千葉晃央、寺本紀子、早樫一男 共編著 中央法規出版）にまとめました。面接で聴きにくい、お金や離婚、再婚の話題、暴力、喪失体験等をどのように話題にしていくとよいのか？ 具体的質問集も収録されています。既刊『ジェノグラムを活用した相談面接入門: 家族の歴史と物語を対話で紡ぐ』（早樫一男編、千葉晃央、寺本紀子著 中央法規出版）と合わせて、ぜひご活用ください。